



「茶色の朝」

● 伊藤 隆夫

国労東日本本部 執行委員長



▲ 3月29日の東京新聞朝刊に「『茶色の朝』迎えぬために」と題した社説が掲載されました。

その社説の内容要旨は、安全保障関連法（安保法）が施行されてから7年目がたち、昨年12月の国家安全保障戦略改定では敵基地攻撃能力の保有まで求めるに至った経過と現状を振り返り、「戦後日本は、他国に軍事的脅威を与えない『平和国家』の道を進んできました。その道から外れ、日本を『戦争できる国』に根本から変えたのが安保法なのです。」と結んでいます。

▲そして、こうした危険な流れに警鐘を鳴らすため、「茶色の朝」（大月書店）という寓話を紹介し、「危険な兆候を見逃さず～思考停止に陥らず～声を上げる。そうした一人ひとりの行動の積み重ねが、『茶色の朝』を迎えることを拒むはず」と訴えています。

▲この本は、1980年代のフランスでの極右政党の台頭・躍進に危機感を感じた作者が1998年に抗議の意思表示として出版、2002年の大統領選挙では決戦投票まで極右政党が残る事態の時にベストセラーとなり「極右にノン」運動の広がりの中で、極右政党候補者を退けたとされています。（フランスでは茶色は、ナチスを連想させるらしい）

▲寓話が国の命運を変えた！ともいえるこの本に興味を持った私（後にアマゾンで購入しなかったことを悔やんだ）は、何のリサーチもせずに「茶色の朝」（大月書店）だけの記憶で書店に出かけたのでした。



まずは、大月書店≒文庫本しかない私は文庫本コーナーを探索、目を凝らし探しても「ない、ない!？」。迷えるおじさんは次に、本の検索機械がある事を発見、あきらめ半分で本のタイトルを入力、「なんと文芸書コーナーあるではないか!」一目散に次は文芸書コーナーに、しかし「ない(ノ)」。最後の手段とばかりに店員さんを見つけだし聞くことに。冷や汗をかきながら自力で探そうとしていた私の苦労をあざ笑うようにすぐさま発見された（さすがプロ）のでした。

▲本を手にするまでの余談が少し長くなりましたが、あらすじは、すべてが「茶色だけ」になってしまう物語です。

ある国で、初めは茶色以外の犬・猫以外は認めないという特措法、その後「茶色党」は新聞、ラジオ、本、競馬のレース、人びとの服装、と何もかも「茶色」以外の存在を許さなくなってゆきます。主人公の男性は違和感を覚えますが、だいに「茶色」に守られた生活に慣らされ日常が流れてゆきます。

最後は自身にも危険が及びますが、その時になって「抵抗すべきだった」と後悔して終わります。

▲読み終えて、少し寒気を感じました。冒頭の社説以外でも、首相による会員任命拒否問題に端を発した日本学術会議問題、放送法に定められた「政治的公平」の解釈の問題、原発回帰の問題など。。

私たちの日常生活には直接関係がないかもしれませんが、ひたひたと忍び寄る暗い影、無関心でいることの怖さを「茶色の朝」が教えてくれている一冊でした。

